

平成20年度「立ち上がる農山漁村」選定事例候補概要書

◎取組分野：【食】

1. 都道府県、市町村 三重県^{たきちょう}多気町
2. 団体名 有限会社 せいわの里
3. 取組みの名称 お年寄りの知恵袋と豊かな資源を次世代につなぐ「まめや」
4. 取組概要等

◇概要

平成6年、農協に置かれた食味計で、地元勢和産の米が新潟県魚沼産コシヒカリと変わらぬ味と知ったことから、普段当たり前と思って見過ごしているものの中に大切な資源があることに気づき、おいしい米に合う特産物を作ろうと十数名で味噌づくりグループを始めたことから活動が始まった。

地域には田畑や山里、高齢者の持つ技術など資源はたくさんあるが、高齢化と後継者不足で20年後には農村文化が廃れていくという危機感から、地域で農産加工やボランティア活動、農業を行っている人に出資を呼びかけ、平成15年11月「農業法人（有限会社）せいわの里」を設立した。その後、平成17年4月に加工品の製造販売・農村料理レストラン「まめや」を開店した。約30名の従業員は30代～70代と幅広い年代で、互いに長所を引き出し合いながら朗らかに仕事をしているほか、農家の女性が多いため、農繁期休業も設定している。

「まめや」では、ランチタイムには“旬の野菜と魚や肉のタンパク源を豆類からお採りいただく農村料理”をコンセプトに地元で採れた大豆「ふくゆたか」や旬の農産物を使った農村料理バイキングを提供し、農産物加工所では味噌、漬物、豆腐、油揚げ、豆乳やおからを使った菓子類を製造している。製品は店内や明和町の直売所で販売する他、町内給食センターへも週2回、600食分の食材を提供している。また、大豆加工品づくりの体験講座や、イベント時などには竹羊羹づくりや竹水鉄砲、わら細工等農村の知恵を活かした様々な体験を企画・実施している。

料理・加工品ともに地産地消による安全安心な食材を使い、営農組合・農家だけでなく、地域のお年寄りや子供達等にも活躍してもらうため、つくし等の買い取りを実施している。

地元「勢和の語り部会」や農村応援隊等と連携して、地域全体の活性化を目標に活動を展開し、農村の高齢者の持つ技術、知恵を次の世代に伝承するため、地域の子供達との関わりをつくり、ふるさとの良さを心に刻んでもらう取組を行っている。

◇活動の規模

項目	H15	H16	H17	H18	H19
大豆買上数量			7,620	6,000	13,110
解説	単位：kg				
売り上げ			22,032	40,241	60,998
解説	単位：千円 H17は10ヶ月、H18は12ヶ月の売り上げ				
来客数			14,079	26,092	34,025
解説	単位：人 昼食バイキングのみ				
雇用者数			18	25	36
解説	単位：人 常勤5人のほか				
地域農産物 買上数量			12,469	18,580	30,738
解説	単位：kg 米・大豆・野菜等				
地域還元金額			12,687	18,940	30,833
解説	単位：千円 農産物等買上金・人件費				

◇活用している地域資源

- ・地域を愛する心、想い、そして人、その連携
- ・地元産の大豆「ふくゆたか」
- ・地元の農産物
- ・お年寄りの知恵（昔から伝わる農産物加工・保存技術など）
- ・農村風景
- ・丹生大師の里
- ・勢和地域保全・活用協議会
- ・丹生営農組合

◇地域活性化のポイント

農産加工・レストランの原材料として地元産大豆を用いるため、集落営農組織「丹生営農組合」が平成16年設立し、大豆栽培を行っている。また米、野菜を中心とした農産物の生産振興にもつながっている。

「せいわの里」の活動や地域の交流施設・団体と連携したイベント等の中で、地元住民が地域の歴史文化、自然、農産物等を活用して、個々の技術を発揮しあっている。既存のボランティアグループとも互いを高め合う良い関係ができています。

「まめや」には平日約100人、休日には約170人が来店している。料理の作り方やおいしく食べるコツを教えたり、地元の自然や農産物の話をしたりと、お客様とのコミュニケーションを大切にしている。雇用の場の確保につながっているばかりでなく、他地区からの来訪、交流を通じて地域住民による地元の価値・技術の再発見につながっている。

◇事業の今後の展開方向

次の世代や都市の人々に、地域の資源（地域農産物、自然、昔から伝わる技術・文化等）を最大限に活用した安心で安全な食や農村文化を提供することによって、それらの大切さを分かってもらう。また、農村文化の継承、農業振興、地域活性化につなげていくため、外に向かつては、都市と農村をつなぐ農村応援ショップを都市部に展開していく。

内であって、里では、地域全体が同じ思いで取り組み連携しており、「せいわの里」も歯車の一つとして貢献している農村応援隊を充実させる。

また、その内にあっては、「せいわの里」の安定的な経営のための土台を堅固なものにするために販路を広げる。そのための設備・組織を充実強化していく。

そして、10年、20年先も孫子も加わり農村がいきいきと農村らしく暮らせるようにしていきたい。

